

『火ぶせの太子』



その勇敢な、というより人間とは思えない行為に、ただ祈るばかりでした。

真っ赤な炎の中で、少年の姿は影絵となって躍動していました。

人々は、恐るおそる見ると、不思議なことに火の勢いは衰えはじめました。

村のみなさん、参道の杉の枝を折り、私と一緒に火を消してください！

かん高い少年の声が、境内に響きわたりました。

腰を抜かして座りこんでいた村の人々は、少年の姿とそのことばに勇気づけられ、一斉に立ち上がりました。手に手に、大小の枝をもち、火に近づきましたが、どうしたことか、ちっとも熱くないのです。

たちまち火は消され、煙とすすにまみれた顔に白い歯を見せて、人々は喜び合いました。寺は、幸い廂（ひさし）を焦がしただけで、さしたる被害ありません。あれほど高く燃え上がった炎は、幻だったのだろうか、と疑うほどでした。

「あの少年は、一体誰だったのだろうか？」



と、村人の一人が言いました。喜びにひたっていた人々は、少年のことをすっかり忘れていました。それぞれが、黒い顔をこすり合って確かめ合いましたが、それらしい少年は、どこにも見当たりません。

あくる日、朝早くから門徒や村の人、知らせを聞いてかけつけた人によって後片づけをしました。

現場の散乱したようすから、たいへんな騒ぎだったことは推察できるのですが、本堂や建物を見ると大火であったことが信じられません。



「ほんとうに炎が天をこがすほどだったのですか？」

「少年が火を消したというのは、ほんとうの話ですか？」

などと言いながら、境内をきれいに掃除しました。

さて、本堂の宝物や経典が、住職や村の人の手によって、一点一点確認されていきますが、それは水一滴すらかぶらず、もとのままでした。



「どうしたことだろう!？」

と、長老はつぶやきました。

「あれほど水をかけたのに。。。」

ひとりが言いました。

人々は、その様子をうかがうように見ていましたが、その不思議なできごとに、思わず手を合わせていました。「**なんまんだ**」とお念仏を称え、その声はしだいに大きくなり、大合唱となって境内に響きわたりました。

なんまんだ
なんまんだ
なんまんだ

挿絵: 梅田宏さん
(あと一回続くよ!)